早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位申請論文

〔概要書〕

近世後期江戸語から明治期東京語における尊敬表現研究

2015 年 10 月

山 田 里 奈

序章　本稿の目的と位置づけ

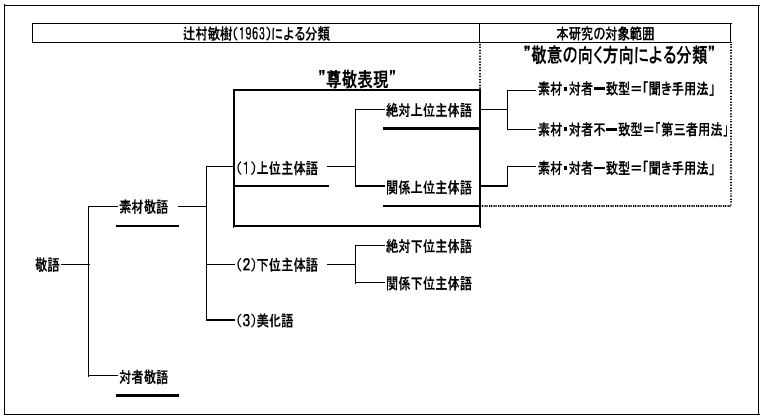
1.　本稿の目的

本稿の目的は、近世後期江戸語から明治期東京語における尊敬表現の使用について、量的、質的に明らかにし、体系的な変化を示すことである。従来、尊敬表現形式「お（ご）～なさる」、「～なさる」、「お（ご）～だ」は、近世後期江戸語から明治期において一般的に用いられたこと、その表す敬意には差があることが指摘されてきた。しかし、階層差、性差、各表現形式同士の関係という点については不十分なままであった。そこで、量的な観点からの考察を加えるために、用例数の分布を示した表を作成するという方法と、各表現同士の関係を明らかにするために、主に上下関係、階層差、性差を観点とした考察を行った。語彙的変遷だけでなく、敬語表現法や敬語意識史との関わりに言及することで、敬語研究へ貢献することができると考えられる。

２．敬語の分類と本稿の立場

本稿では、辻村敏樹（1963）のいう、「素材敬語」のうち、上位主体語を扱う。いわゆる尊敬語に当たる、話し手が、聞き手の方が自分よりも上位であると判断した場合に用いる表現である（本稿で「尊敬表現」という場合、上位主体語を指す）。

【図】本研究で用いる用語の指す範囲



辻村氏との違いは、図中、点線で囲った箇所である。「絶対上位主体語」と「関係上位主体語」は、それぞれ素材敬語と対者敬語の敬意の向く対象が一致する場合（山崎久之（1963）のいう「対称の主体待遇表現」）と一致しない場合（山崎（1963）のいう「他称の主体待遇表現」）に分けられる。これは、山崎（1963）が区別する理由として挙げる、①待遇段階の数（第六章と関連）、②待遇表現意識の鋭鈍の傾向の二点に留意するためである。本稿では、素材敬語と対者敬語の敬意の向く対象が一致する場合（「素材・対者一致　」）を「聞き手用法」、素材敬語と対者敬語の敬意の向く対象が一致しない場合（「素材・対者不一致型」）を「第三者用法」と呼ぶ。これは、近世後期と明治期が丁寧語「です」の発達時期であり、「です」「ます」がどのように一般化していくのかを知るために必要な下位分類であると考えたためである。

３．先行研究―体系表作成による研究

待遇表現の体系表作成による研究は、山崎久之（1963・1966）や小島俊夫（1974・1998）によって進められてきた。これらは、主に対称代名詞と動詞の対応関係により待遇段階を定めている。山崎（1966）では五段階（さらに、それぞれ第一段階と第二段階を二段階に区分）、小島（1974）では四段階（さらに段階Ｂ、段階Ｃをそれぞれ二段階に区分）を設定する。これらの

方法は、どのような対称代名詞とともに動詞が用いられるのかを示し、その対応関係の変化によって、表す敬意の変化を明らかにすることができる。それは、当時の人々の待遇意識を知る手がかりにもなる。しかし、山崎（1966）は町人男性の使用についてのみの研究であるために、小島（1974）は町人の使用をまとめて扱う研究であるために、階

第一章　調査資料と方法

第二章では、研究の方法や用語、対象時期などについて説明をした。

１．近世後期江戸語、明治期東京語

本稿で扱う「近世後期江戸語」の指す時期は、明和以降から江戸末期までの資料に見られる言語である。そして、町人のあいだに行われた言語を指すこととし、武家の言葉は対象としない。「明治期東京語」は、明治初年から明治３０年まで（時期を指すとき、「明治中期」と呼ぶ）の資料に見られ、「話し言葉」として用いられた言語を指す。

２．調査資料

江戸後期の資料としては、洒落本、滑　　、人情本を用いた。明治中期の資料は小説や落語速記本などを用い、適宜、小新聞の調査も行った。

４．〈一般形〉と〈特定形〉

清水康行（1995）、菊地康人（1994・1997）に説明があるが、菊地（1994・1997）で用いられている用語を用い、〈一般形〉を「多くの動詞について使える形（～（ら）れる、お（ご）～になる、お（ご）～だ）」とし、〈特定形〉を「特定の動詞に対応する形（なさる、いらっしゃる、くださる、おっしゃる、召し上がる）」とする。単純に考えて、〈特定形〉を持つ動詞の種類は、〈一般形〉よりも多い。例えば、〈言う〉の尊敬表現であれば、〈特定形〉として「おっしゃる」が、〈一般形〉として「お言いなさる」、「言いなさる」が考えられるが、〈考える〉の尊敬表現であれば、〈特定形〉はなく、〈一般形〉の「お考えなさる」、「考えなさる」である。このように、〈一般形〉しか持たない動詞と〈特定形〉を持つ動詞の使用について分けて考察を行うことにより、それぞれの特徴を明らかにすることができる。

５．敬語の成立条件

本稿でまず重視するのは、上下関係である（後述）。そして、それぞれの表現がどのように用いられているのかを考察する観点として、以下の敬語の成立条件を考える。これは、南不二男（1987）、辻村敏樹（1992）、菊地康人（1994・1997）を参考に本稿でまとめた条件である。

［尊敬表現の使用を見る上での留意点］

ア　資料による差（資料による使用の偏りが見られる場合）

イ　尊敬表現の出現位置（文末（句点または終助詞）、文中に出現しにくい場合があるとき）

［敬語の成立条件］

ウ　性差　エ　場面（改まり―くだけ／粗野／尊大）　オ　丁寧―ぞんざい／上品―卑俗
カ　親疎　キ　心理的偏り　ク　話し手に特徴が見られる場合　ケ　威厳や威圧感を伴う

このうち、特に、「イ　尊敬表現の出現位置」や「カ　親疎」は江戸後期から明治中期における変化として現れる。「オ　丁寧―ぞんざい／上品―卑俗」は、階層による尊敬表現を用いるときの意識の差に現れる。「ウ　性差」、「エ　場面」、「カ　親疎」、「キ　心理的偏り」、「ク話し手に特徴が見られる場合」が見られる場合、その表現の使用には制限があると考える。

６．考察方法

（１）聞き手用法　話し手と聞き手の上下関係、階層により用例数の分布を示した表（以下、「用例数分布表」）を作成する。用例数分布表を元に、階層差や性差、どのように用いられているのかを明らかにする。どのように用いられているのかというのは、「５．敬語の成立条件」で挙げた、「尊敬表現の使用を見る上での留意点」と「敬語の成立条件」である。用例数による使用の違いを示すために、用例数分布表に使用頻度を入れた「使用頻度入り用例数分布表」を作成する。使用頻度の数値に合わせて記号（◎、○、△、・）と敬語の成立条件による特徴（ア～ケ）を付与した表を「体系表」と呼ぶ。

用例数分布表

階層	中流以上の人々の使用					下層の人々の使用					遊里の女性の使用					
〈一般形〉＼上下関係	A（下→上）	B〈対等〉	C（上→下）	D	計	A（下→上）	B〈対等〉	C（上→下）	D	計	A（下→上）	B〈対等〉	C（上→下）	D	計	
お～あそばします	5	6		1	12	5				5	1				1	不明1
お～あそばす	10	18		1	29	29				29					0	不明6

使用頻度入り用例数分布表

階層	中流以上の人々の使用										下層の人々の使用										遊里の女性の使用										
上下関係	A〈下→上〉		B〈対等〉						C〈上→下〉		A〈下→上〉		B〈対等〉						C〈上→下〉		A〈下→上〉		B〈対等〉						C〈上→下〉		
〈一般形〉			Ba		Bb		Bc						Ba		Bb		Bc						Ba		Bb		Bc				
お～あそばします	4	4.6%	3	1.7%	3	1.1%					5	3.4%									1	0.5%									不明1
お～あそばす	10	11.5%	14	8.0%	4	1.5%					30	20.3%																			不明6

体系表

階層	中流以上の人々の使用					下層の人々の使用					遊里の女性の使用				
尊敬表現形式／上下関係	A（下→上）	B〈対等〉			C（上→下）	A（下→上）	B〈対等〉			C（上→下）	A（下→上）	B〈対等〉			C（上→下）
		Ba	Bb	Bc			Ba	Bb	Bc			Ba	Bb	Bc	
お～あそばします	△7	△7	△7			△7					・7				
お～あそばす	◎7	○7	△7			◎7									

◎…10%以上、○…5%以上～10%未満、△…1%以上～5%未満、・1%未満／アー資料による差

（２）第三者用法　話　　、話し手と聞き手の両方に関係のある人物か、聞き手側に属する人物かによって分類する。各〈一般形〉がどのように用いられ、聞き手用法とはどのように異なるのかを明らかにする。

（３）上下関係　基本的には社会的身分によって次のように三分類する。

Ａ〈下→上〉の関係（主従関係、身分差）／Ｂ〈対等〉の関係（身分差なし）／Ｃ〈上→下〉の関係（主従関係、身分差）

ただし、謝罪や懇願しているために単純に身分関係だけでは判断できない例については、Ｄの関係とし別に扱う。Ｂ〈対等〉の関係は、さらに次の三通りに分類する。

・Ｂａ〈話し手が聞き手よりも低い立場にある場合〉の関係
・Ｂｂ〈互いに近い敬意を表す表現を用いる場合〉の関係
・Ｂｃ〈話し手が聞き手よりも高い立場にある場合〉の関係

この三分類は、上記のＡの関係、Ｂの関係、Ｃの関係のような社会的身分関係による分類で

はない。同じ階層に属する人物間で、年齢差や性差、立場による上下関係、互いに用いる表現の違いなどによる上下関係を反映させた表現選択を知るために分けた。

（４）階層

階層は、中流以上の人々の使用（豪商、表通りに店を持つ者とその妻、店主とその妻、お屋敷奉公の経験者など）、下層の人々の使用（裏通りに住む者とその妻、店の下働き、下男・下女など）、遊里の女性の使用（花魁、新造、遣手、禿など）に分類した。

第二章　本稿の対象とする尊敬表現の位置づけ

第二章では、近世後期江戸語から明治期東京語における〈一般形〉「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」等の使用について明らかにされていることをまとめた。現代語の使用から近世後期江戸語と明治期東京語を眺めたとき、どのような特徴が見られるのか、何が問題になるのかを述べた。

第Ｉ部　江戸後期から明治中期における〈一般形〉の使用

第Ｉ部では、〈一般形〉の使用について、聞き手用法を命令形以外の使用、命令形の使用、行為を要求する〈てくれ〉の尊敬表現の使用に分けて考察を行い、さらに、第三者用法、遊里の女性に特有の使用の考察を行った。

第三章　江戸後期から明治中期における〈一般形〉の使用

―命令形以外で用いられる「お～なさる」系、「～なさる」系、「お～だ」系を中心に―

第三章では、〈一般形〉の命令形以外の使用を明らかにした。

（１）従来の江戸後期、明治期における〈一般形〉の説明は、「「（お）……なさる」形式の言い方は、〈中略〉「お……遊ばす」「お……だ」の間にあって、男にも女にも、また階級差も問わず、まず最も一般的な形式として用いられていたようであり、その意味では今日の「お……になる」形式に匹敵するものと言えよう。（辻村(1968)P. 237）」という説明がされてきた。これは当期の使用を端的に捉えた説明である。しかし、この説明では、現代語における「お～なさる」が古くさいひびきを持ち、「～なさる」が一般的に用いられるという使用状況へのつながりを見出しにくい。すなわち、「お～なさる」が用いられなくなる一方で、これよりも表す敬意の低い「～なさる」が現代語において尊敬表現形式として残存する理由が不明である。そこで、本稿では、体系表を作成し、「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」の関係と使用について考察を行い、「お～あそばす」、「お～になる」、「お～でございます」、「お～です」をも含めた〈一般形〉の使用を明らかにした。

その結果、「お～なさる」は、当期、一般的に用いられた形式であるが、「～なさる」、「お～だ」にはいくつかの特徴があることがわかった。江戸後期の「～なさる」は、Ａ〈下→上〉の関係では用いられにくく（中流男性や遊里の女性の使用で用いられる場合、心理的な偏りが見られる）、Ｂ〈対等〉の関係では、性差による偏りが見られた。一方、明治中期には、特に２０年代以降では、「漢語サ変動詞＋～なさる」の用例数増加と、Ａ〈下→上〉の関係で高い敬意を

表す場合に用いられる例が見られるようになった。「お～だ」は、江戸後期の使用では活用形によって使われる人間関係の範囲は異なるものの、A〈下→上〉の関係からC〈上→下〉の関係までの広い関係の範囲で用いられた。しかし、明治中期になると、家族内での会話に偏って用いられるようになり、話し手も限られるようになった。すなわち、江戸後期と明治中期における〈一般形〉「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」は同じ説明では不十分である。江戸後期から明治中期に見られる変化の要因としては、丁寧語「です」の発達による文末への意識の強まりと漢語サ変動詞の増加傾向を挙げることができる。

（2）江戸末期から明治中期において出現した〈一般形〉に「お～になる」系を挙げることができる。従来、「お～になる」系が用いられるようになる要因としては、「「お～なさる」系が使い古され」たためであると説明されるだけであった。本稿のように他の形式とともに体系的にまとめて比較すると、「お～なさる」系が「使い古され」たという説明を階層や性差などによる制限がなく多用されていたという状況と数量的な観点から説明することができる。

第四章　江戸後期から明治中期における〈一般形〉の命令形
―「お～なさい」系、「～なさい」系、「お（ご）＋動詞連用形」を中心に―

第四章では、〈一般形〉の命令形の使用について述べた。

（1）音訛形「お～なせえ」や「～なせえ」の使用については、音訛する分「お～なさい」や「～なさい」よりも軽い敬意を表すという説明と「お～なさい」や「～なさい」とは別の表現であると考えるべきだという説明がされてきた。しかし、その詳しい説明はされてこなかった。本稿の考察結果では、それぞれ次のように説明することができる。「お～なさい」に性差は見られないが、「お～なせえ」には中流男性が多用するという性差を指摘することができる。「～なさい」は敬語の成立条件に関わらず用いられるが、江戸後期における「～なせえ」は制限のある形式である。音訛形には、性差や心理的な偏りなどの特徴が見られるのである。

（2）従来、命令形の使用について説明されるとき、命令形以外の使用との比較は行われてこなかった。第三章の考察と合わせて命令形以外の使用と命令形の使用を対照させることにより、同形式の命令形以外と命令形が対応しているとは限らないこと、命令形以外の使用と命令形の使用をそれぞれ見ていただけでは見られなかった変化を指摘することができた。

第五章　江戸後期から明治中期における〈てくれ〉の尊敬表現
―「ておくんなさい」系、「てください」系、「お～ください」系を中心に―

第五章では、聞き手に行為を要求する〈てくれ〉の尊敬表現の使用について明らかにした。

（1）〈てくれ〉の尊敬表現のバリエーションの変化については工藤真由美（1974）に詳しい。しかし、各表現の表す敬意や関係については不明な点が残されていた。「まし」を下接する例としない例に注目した本稿の調査の結果、江戸後期では「尊　　＋てくださいまし」や「お～くださいまし」の使用は見られるものの、「尊敬語・尊敬表現形式＋てください」や「お～ください」の使用は少なく、明治中期になってから一般化するという「まし」の有無

による使用の広がりの遅速を指摘した。さらに各表現の表す敬意とそれぞれの関係を記述することにより、工藤（1974）の示す〈てくれ〉の尊敬表現のバリエーションの変化に生じている各表現の変化について補足することができた。

（２）〈一般形〉の命令形において、〈依頼〉と〈勧め〉両用から〈勧め〉への移行が見られる（森勇太（2010））。本章では、この指摘に対して、個々の〈一般形〉の命令形の〈勧め〉への移行状況を示し、高い敬意を表す表現―「お～あそばせ」系や「お～なさいまし」―にその移行が早いことを指摘した。そして、今まで「お～あそばせ」系や「お～なさいまし」が担っていた〈依頼〉では、新しく「尊　　＋てくださいまし」や「お～くださいまし」、「～てくださいまし」等、高い敬意を表す表現が用いられるようになることを述べた。

第六章　江戸後期から明治中期における第三者用法〈一般形〉の使用
―聞き手用法〈一般形〉との違いを中心に－

第六章では、第三者に対して用いられる〈一般形〉の使用について、特に聞き手用法の使用との尊敬表現選択の違いに着目して考察を行った。従来、第三者用法の〈一般形〉と聞き手用法の〈一般形〉の使用の違いについて明らかにされてこなかったためである。考察の結果、第三者用法と聞き手用法では用いられる関係の範囲が異なることを示すことができた。ずれが生じる要因としては、第三者用法は、聞き手用法よりも用いられる〈一般形〉のバリエーションが少ないことが影響していると考えられる。

この結果と敬語意識史との関わりについても考察を行った。「時代が下ると聞手によって敬度を加減するという相対敬語的な要素が増してきて、ついには身内敬語を差し控えて、敬語的人称に従って使う相対敬語へと変化してきた（菊地（1994，1997））」という考えに基づいて、江戸後期と明治中期における第三者用法の〈一般形〉の使用を見ると、尊敬表現形式が用いられているとはいっても、聞き手用法で選択される〈一般形〉よりも低い敬意を表す〈一般形〉を用いる傾向へと移行する流れが見られた。

第七章　〈一般形〉「お（ご）～になる」系の使用
―江戸後期から明治中期における拡大の様相―

第七章では、江戸末期に発生し、明治２０年前後に一般化すると言われている「お（ご）～になる」系の使用について取り上げ、その変化の様相を明らかにした。

（１）文学作品における「お～になる」系の使用

江戸末期の発生時期には、聞き手用法においても第三者用法においても高い敬意を表す場合に用いられ、用例数も少ない。明治中期になると、用例の増加が見られ始める。明治１０年代前半では高い敬意を表す場合にしか用いられない。明治１０年代後半になると、Ｂ〈対等〉の関係で互いに用いるような例が見られるようになり、一般化したと言っていい状況になる。

（２）小新聞における「お～になる」系の使用

山田巌（1958）において指摘されているように、「お～になる」系は小新聞に用例が見られ

る。表す敬意と用例数という観点から小新聞の用例を見ると、明治１０年代前半の使用では用例数が多いが、明治１０年代後半になると用例数が減少する傾向を指摘することができる。これは、小新聞が文語体へ回帰する明治１０年代後半に近づくに従って「お～になる」の用例数が減少したと考えられる。そしてこのような用例数の減少は、「お～になる」が口頭語として認識されていたことを示している。同じ時期に文学作品において使用範囲の広がりが見られ始めるためである。これにより、従来「お～になる」の一般化の時期が明治２０年前後であるという説と明治１３年頃であるという説があったが、明治１０年代後半から明治２０年前後であるという結論を示すことができた。

第八章　遊里の女性の使用する表現　―「(お) ～なんす」「(お) ～なます」の使用を中心に―

第八章では、江戸後期に特に遊里の女性の使用に多く見られる「お～なんす」、「お～なます」、「～なんす」、「～なます」の使用について考察を行い、中流以上の人々や下層の人々が多用する〈一般形〉「お～なさる」や「～なさる」、「お～だ」との使用の違いについて述べた。

まず、従来明らかにされているように、洒落本に「～なんす（し)」、「お～なんす（し)」が、人情本に「～なます（し)」、「お～なます（し)」が用いられる傾向を確認した。

次に、他の形式との比較を行った。洒落本では、「～なさる」と音訛形「～なんす」「お～なんす」が用いられていたが、人情本では、「お～なさいます」、「お～なはいます」「お～なさる」、「お～なはる」と「お～なんす」、「お～なます」、「～なんす」、「～なます」が用いられる。滑稽本では人情本の使用に似た使用を示す。遊里の女性の使用において、町人の使用する表現を使用する傾向、「お」を冠する表現を用いる傾向が強まるという流れを説明した。

第Ⅱ部　江戸後期から明治中期における〈特定形〉を持つ動詞の体系的な使用

第Ⅱ部は〈特定形〉を持つ動詞の体系的把握を行うために、〈行く・来る・いる〉の尊敬表現、〈言う〉の尊敬表現、〈見る・てみる〉の尊敬表現を取り上げた。

第九章　江戸後期から明治中期における〈行く・来る・いる〉の尊敬表現
―〈特定形〉「いらっしゃる」系拡大の様相を中心に―

第九章では、〈行く・来る・いる〉の尊敬表現という枠組みを設け、〈特定形〉「いらっしゃる」の使用を中心に考察を行った。「いらっしゃる」系は江戸中期に発生し、明治２０年前後に一般化する〈特定形〉である。山西正子（1974）では「いらっしゃる」とその周辺の表現を集めて通時的な研究を行っているが、「ます（まし)」を下接するかしないかの違いについては触れていない。本稿では、第五章で扱った〈てくれ〉の尊敬表現の使用に見られたような「ます（まし)」を下接するかしないかによって、使用の拡大する様相に違いが見られるのかということ、一般的に用いられるようになる様相、〈一般形〉「おいでなさる」、「おいでになる」との関係などについて明らかにした。

（１)「いらっしゃる」系の使用は、江戸中期において発生したばかりの用例で、「ます（まし)」

が下接する「いらっしゃいます」、「いらっしゃいまし」の方が「いらっしゃる」、「いらっしゃい」よりも多く用いられる傾向にあることを指摘し、〈てくれ〉の尊敬表現の使用拡大との共通性について述べた。

（2）「いらっしゃる」系は、挨拶の表現（命令形の形をしているが、聞き手に対して行為を要求しない場合を「挨拶の表現」とする）における広がり、意味領域の広がり―〈行く・来る・居る（本動詞）〉、〈ている（補助動詞）〉―が江戸後期から明治中期に見られ、〈特定形〉として一般的に用いられるようになる。従来、「いらっしゃる」系が「おいでなさる」系と交替する、「おいでになる」系は「いらっしゃる」系の勢力に及ばないなどと説明されてきた事象の理由づけをすることが可能になった。

第十章　江戸後期から明治中期における〈言う〉の尊敬表現
―「おっしゃる」系、「おいいなさる」系の使用を中心に―

第十章では、〈言う〉の尊敬表現について、〈特定形〉「おっしゃる」系の使用を中心に考察を行った。「おっしゃる」系は江戸中期頃から用いられたシャル敬語である。高い敬意を表す表現として江戸後期、明治中期、現代語にまで用いられる表現である。この「おっしゃる」が高い敬意を表す表現として存在していたために、(シャル敬語でないにも関わらず)「いらっしゃる」系が発生、発達したのではないかという指摘があるが（山西正子（1974））、これについて詳しく述べた研究はなかった。

（1）「おっしゃる」系の使用は、聞き手用法においても、第三者用法においても、聞き手に高い敬意を表したり、第三者に対して高い敬意を表す場合に用いられる。「おっしゃる」系の特徴としては、命令形の「おっしゃいまし」、「おっしゃい」は用いられにくく、聞き手に対して行為を要求する場合は「～てくださいまし」、「～てください」を接続した「おっしゃってくださいまし」、「おっしゃってください」が用いられる傾向にあることである。これは高い敬意を表す一般的な「～てください」系（第五章）と結びつきやすいという点で、高い敬意を保つ要因の一つとして働いたのではないかと考えられる。

（2）「お言いなさる」系の使用は、江戸後期、特に人情本に多く見られ、明治中期においても中流女性の使用などに見られるが衰退する。〈一般形〉「お～なさる」系が一般的に用いられた時期において、「お言いなさる」系は「おっしゃる」系の勢力に及ばないまま衰退するのである。「おっしゃる」系との違いは、命令形「お言いなさいまし」、「お言いなさい」の使用が全体の用例数は少ないものの命令形以外と同じように見られることである。明治中期になっても「お言いになる」系の使用は見られず、高い敬意を表す表現としては、〈特定形〉の「おっしゃる」が一般的である。このように他の表現を寄せ付けず、高い敬意を表す表現として用いられた状況が、「いらっしゃる」系拡大の要因の一つとして働いたのではないかと考えられる。

第十一章　江戸後期から明治中期における〈見る・てみる〉の尊敬表現
―「(て）ごろうじる」系の衰退と「(て）ごらんなさる」系拡大の様相―

第十一章では、〈見る〉の尊敬表現、〈てみる〉の尊敬表現という枠組みを設け、〈特定形〉の「(～て) ごろうじる」系の使用と、〈一般形〉の「(～て) お見なさる」系の衰退、〈一般形〉の「(～て) ごらんなさる」系、「(～て) ごらんになる」系の使用の広がりについて明らかにした。

（1）「(～て) ごろうじる」系の使用は、従来、他のすべての尊敬表現と比較されていたために、用例数が少なく、あまり用いられない表現であると説明されてきた（辻村敏樹（1968））。しかし、〈見る・てみる〉の尊敬表現という枠組みで見ると、江戸後期においては一般的な表現であることがわかった。ただし、「(～て) ごろうじます」、「(～て) ごろうじまし」は聞き手に対して高い敬意を表す場合に用いられるが、「(～て) ごろうじる」、「(～て) ごろうじろ」には、慣用的な表現への偏り、使用者の偏りを指摘することができる。明治中期になるとこの傾向は強まり、さらには、「(～て) ごろうじます」、「(～て) ごろうじまし」の衰退にまで影響を与える。「(～て) ごろうじる」「(～て) ごろうじろ」と交替する形で用例数の増加が見られるのは、「(～て) ごらんなさる」系の使用である。江戸後期における使用では「(～て) ごらんなさい」、「(～て) ごらんなせえ」の使用に偏っていたが、明治中期になると、用例数も増加し、「(～て) ごろうじる」系の勢力を上回るようになる。「(～て) お見なさる」系は、江戸後期、特に人情本において、中流女性や遊里の女性の使用に特徴的に見られた。さらに明治２０年代になると「(～て) ごらんになる」系も出現する。〈見る・てみる〉の尊敬表現のバリエーションが〈特定形〉「(～て) ごろうじる」系から〈一般形〉を使った表現「(～て) お見なさる」系へ移行し、さらに「(～て) ごらん」を使った〈一般形〉の表現―「(～て) ごらんなさる」、「(～て) ごらんになる」―へと移行することがわかる。

（2）〈見る・てみる〉の尊敬表現である、〈見る〉の尊敬表現と〈てみる〉の尊敬表現ではその使用に違いが見られる。命令形以外での使用と命令形での使用における用例数の偏りの違いや〈てみる〉の尊敬表現で用いられる表現は、〈見る〉の尊敬表現で用いられる表現よりも遅れて使用されるようになることなどである。

終章　近世後期江戸語と明治中期東京語

１．本研究の意義

江戸後期から明治中期における尊敬表現の使用についての研究は、一つの表現に着目してその変遷を追う研究、表す敬意の段階を明らかにする体系的研究などが行われてきた。しかし、全体の用例数に占めるその表現の使用頻度という量的な観点や対象時期が丁寧語「です」の発達による文末への意識が高まる時期であるという観点などが不足していた。これを補うために、用例数分布表を作成し、使用頻度を算出し、体系表によって示す方法で研究を進めた。視覚的にも表現同士の関係性がわかるように示したこと、聞き手用法では「ます（まし)」を下接する表現を別に扱って、使用の違いを明らかにすることにより、文末への意識の変化を説明したこと、〈一般形〉と〈特定形〉にわけてそれぞれの使用について明らかにしたことが本研究のオリジナル性であり、意義である。

２．従来の体系表作成による研究との違い

（１）本研究で明らかになること

本研究で明らかにできることは、語彙の変化、敬語表現法の変化、敬語意識史との関わり、用例数の多寡を知ることである。序章や各章において述べたように、山崎（1966）や小島（1974）では、用例数の多寡が示されていないために、同じ待遇段階に所属する表現の違いがわからない。また、小島（1974）では江戸後期と明治期の体系表を作成しているものの、本稿の対象とする高い敬意を表す〈一般形〉の所属する待遇段階に変化が見られないまとめ方になっていた。これらの問題を解決するために、用例数の全体にしめる割合を「◎、○、△、・」で示し、敬語の成立条件について記号を付すことにより、各時期の使用状況と〈一般形〉の関係を一目でわかるように示した。

（２）本研究では不足すること

本稿では、山崎（1966）や小島（1974）のように待遇段階の設定を行わず、明確な線引きをしなかった。これは、階層による表現選択の違いを知ることや変化の兆しを示したいという考えがあったためである。代表的な表現を取り上げ、待遇段階を設けて位置づけるのではなく、用法による使用頻度の偏りや言いにくそうでも使用する「お言いなさる」「お見なさる」の存在の指摘、その使用状況の説明をするという立場にたった。

３．今後の課題

本稿では尊敬表現形式の使用を中心に考察を行ってきた。敬語研究、待遇表現研究として近世後期江戸語、明治期東京語の実態を明らかにするためには、いわゆる謙譲語や丁寧語の使用状況についても考察を行い、今回の考察結果と照らし合わせていく必要がある。これにより、第五章で見られた絶対敬語的な使用から相対敬語的な使用への移行と丁寧語の発達との関連や中流以上の人々の使用に見られた丁寧な言葉づかいを好む傾向と丁寧語発達との関わりなど、敬語研究全体へと発展させることができるだろう。また、通常語や今回扱わなかった他の表現形式との関わりへと視野を広げることで待遇表現体系の構築へとつなげることができるだろう。これらについては今後の課題としたい。